

一ロシア水兵の墓誌

中村喜和

1

寛政四年（1792）の晩秋から翌五年の春にかけてラクスマン使節一行が蝦夷根室で越冬中、ひとりのロシア水兵が病死した。水兵の名はセミョーンと判明しているが、姓についてはまだ定説がない。以下の小文は、かつてこの病没水兵の墓の上に立っていた墓標に関するものである。

ラクスマンは、日本に派遣された最初のロシア使節であった。その任務は、まず第一に、大黒屋光太夫をはじめとする3人の漂流日本人を母国に送り返すことであり、さらには、この機会を利用して、日本とのあいだに通商関係を樹立することであった。

のちに光太夫からの聞書を蘭学者桂川甫周が一本にまとめた『北槎聞略』によって、ラクスマン使節団の構成を知ることができる。すなわち、「護送使臣」アダム・ラクスマン、エカテリーナ号「船司」ワシーリイ・ロフツォフ、「通事」エゴール・トッゴルコフ、以下身分と氏名が明らかにされている者11名、「右の外、小吏十名、水手十八名、漂人三名」、合計して「合船四十一名」であった¹⁾。

さらに、ロシア側の資料を用いているA. ボロンスキイの『千島列島』によると、「水手十八名」の内訳が水兵15名、兵卒3名で

あったことがわかる²⁾。病死したセミョーン某はこの15人の水兵の中のひとりだったにちがいない。ボロンスキイは日本に来航すべくエカテリーナ号に乗り組んだすべてのロシア人がこの任務に対して支給された給与も示している。それによると、ラクスマン使節は1500ルーブル、ロフツォフ艦長は800ルーブルを与えられたのに対し、水兵は1人あたり68ルーブルを受け取ったにすぎない。ちなみにこの一行には80ルーブルの給与を受ける見習医師 лекарский ученик が同伴していたが、ロシアの軍艦にはつきものの司祭はひとりもいなかった。これは使節団の規模が比較的小さなものであったためかもしれないし、あるいはロシア側が幕府のキリスト教禁教政策に気がついた結果かもしれない。

帰国後の公式復命書ともみられる『A. ラクスマン使節団訪日誌』にしたがえば、エカテリーナ号が根室に到着したのは1792年10月9日（露暦、以下同じ）である。日本側との正式な交渉はすぐには始まりそうもなかったので、ラクスマンらはただちに同地での越冬を決め、宿営地の設営にとりかかった。それは日本人の住む建物（運上屋）から100メートルあまりはなれた場所であった。11月中旬になって将校用の居室と兵舎が完成し、若干の哨兵をエカテリーナ号に残して、他の全員が上陸して新しい宿舎に移った。それ以

後、幕府の全権代表と松前で交渉するため翌年の5月末にこの冬営地を引きはらうまで(根室出港は6月4日)半年以上ものあいだ、40人ほどのロシア人が日本人やアイヌ人のあいだで冬ごもりの生活を送ったのであった。

『露人根室冬営之図』と呼ばれる絵が伝わっている³⁾。この絵から、日本側が木造家屋の運上屋の周囲に高く葺簀をめぐらしているのに対し、ロシア人が一種土小屋風の屋内にベチカをもうけ(煙突から煙が立ちのぼっている)、半ば穴居していたことがわかる。また、ほかに将校用の居室の内部を描いた絵があり⁴⁾、そこにはラクスマン、ロフツォフらとともに、光太夫の姿も見える。

セミョーン水兵が死んだのは1793年4月11日であった。グレゴリオ暦では4月22日にあたる。このことはさきの『訪日日誌』の中では、「11日早朝一水兵が壊血病で死亡した⁵⁾」と軽く1行で片づけられている。『日誌』は死者の姓名を記さぬまま、次のようにつづいている。「今春中この病気に冒された者は15名に達した。そのためバイダラに乗って近隣諸地方を検分に出かけることが不可能になった。」バイダラとは、千島やカムチャトカ地方で多く用いられる皮製の小舟のことである。使節の主要な関心は、不運な水兵の死よりも、所期の任務の遂行に支障が生じたことのようにかたむいている。

壊血病で死んだのはセミョーンばかりではなかった。光太夫の配下のひとり小市も4月30日になくなった。当時の邦暦では4月2日、現行の暦の5月11日である。10年にわたり異境で辛酸をなめ、ようやく帰りついた蝦夷の地で一命をおとしたわけである。『訪日日誌』の中でラクスマンは、小市の看病が日本側医師の手にゆだねられていたことを明らかにし、以前小市はカムチャトカでこの病気に

かかったとき черемша(ユリ科の植物、にんにくの種類か。学名は *Allium ursinum*) で治癒したことがあるにもかかわらず、日本人が壊血病というものをもまったく知らないために煎じ薬と鍼術をほどこすばかりで、適切な治療を受けられなかった、と述べている⁶⁾。日本人の医師とは、おそらく松前からロシア使節応接のために派遣された加藤肩吾のことであろう。加藤の名は『訪日日誌』にも『北槎聞略』にも見えている。もうひとり医者として今井元安なる人物の名もあげられているが、元安は春先には松前へ帰っていた。

ラクスマンの非難がどれほど根拠をもつものであったかは、わからない。げんに、ロシア側にも壊血病患者は続出したわけであるし、死亡者さえ出ているからである。使節団につきそってきたのが水兵なみの待遇の見習い医師にすぎなかったことを考えれば、治療の点ではロシア人のほうもあまり自信をもてなかったかもしれない。

加藤肩吾と同道して根室へやってきた松前藩士鈴木熊蔵も、セミョーンや小市と相前後して死亡した。ただしその死因は不明である。

2

セミョーン水兵のために、墓標が立てられた。その墓標には、ロシア文字が刻まれている。これにふれている文献は、文化八年(1811)から同十年(1813)まで蝦夷に囚われていたゴロヴニーンが、帰国後にあらわした有名な『日本幽囚記』である。すなわち、

……その後われわれのところへ墓誌の翻訳という仕事が出来てきた。これはネムロという場所の近くの一本の木に、ロフツォフ航海士が刻んだもので、その木の根元には、かつてラクスマンがここで冬営したと



き、壊血病のために死んだある乗組水兵の遺体が葬られていたのである。この仕事は一時間ですんだ。なぜならば、日本側は疑いもなくラクスマン自身からすでに翻訳を手に入れており、すぐにわれわれの翻訳がそれに近いことを知って、彼らが安心したからである⁷⁾。

もうひとつの、さらに確実な証拠が、『北槎聞略』の編者桂川甫周の後裔にあたる鎌倉今泉家に所蔵されている。それ

はこの墓標そのものの拓本(写真参照)である。最近物故された今泉源吉氏の労作『桂川の人々』(全3冊のうち第1巻)の中に次のような記述がある。

(ロシア水兵の墓誌は)桂川中良の『惜字帖』第二の八十ページにはりつけてある。外国文字の拓本である。非常に細長く、縦は曲尺で二尺一寸五分、横は三寸五分くらいもある。紙は、やや堅い非常に厚い日本紙である。木に刻んであるものの摺本と見え、縦に通っている木の目がじゃまになって、文字がよくわからない⁸⁾。

桂川中良は甫周の弟、やはり有数の蘭学者で、『万国新話』・『紅毛雑話』等多数の著書をあらわした。森島の姓を名のこともあり、

森羅万象と号していた。『惜字帖』というのは、中良が折にふれ入手した珍しい文字や図柄のある紙片をはり混ぜたもので、上下2巻、オランウータンの極彩色の図とか琉球人の書とか中国わたりの琴絃の包装紙とかがここに含まれている。

筆者も今泉家でこの拓本を実見する機会に恵まれたが、たしかに読みにくい文字という印象を受けた。それは、刻みが不十分であったためでも、摺りが不手際であったためでもなく、墓標が立てられて年月がたつうちに、はるかオホーツクの海から吹きつける風雨に打たれ、木目が次第に浮き出てきた結果であるように思われた。

ゴロヴニーンの言葉の中で不可解なのは、この墓誌をロフツォフが刻んだと断定していることである。のちにみるように、墓誌自体の中にロフツォフの名はない。ラクスマンの『訪日日誌』は墓についてすら一言もふれていない。ゴロヴニーンが拓本あるいは筆写を通じて墓誌に接したのは、ラクスマン来航後約20年を経てからであるが、周囲の日本人の中にはまだ故事を記憶するものがいたのであろうか⁹⁾。

さて、墓誌を読み解く試みはすでに4回行なわれた。『日本幽囚記』の記述を信用すれば、まず第一にラクスマン、次にゴロヴニーン、第三は最近にいたって今泉源吉氏、そして最後に村山七郎教授である。このうち、ラクスマンとゴロヴニーンの記事は今日に伝わらない。今泉氏の原文復元とその和解は『桂川の人々』に掲げられており、村山教授のそれは、はじめ雑誌『新しい道史』に発表され、のちに同教授編著『ロモノーソフ以前の二つのロシア文法』に収められた¹⁰⁾。村山教授は今泉氏の解説に「多少問題点も残されている」と見る立場から、それを修正する意味で、新しい試案を提示されたのである。実を言え

ば、私は村山教授の示された読み方とくに不満があるわけではない。したがって以下に提出する試読は、村山案に対する修正というより、可能性としての別解である。

(行)	(本文)
1	1793 ГОДА АПРЕЛЯ
2	11 ДНЯ БЫВШЕИ ВЪ
3	ЯПОНСКОЙ ЕКСПЕ
4	ДИЦИИ МАТРОЗЪ
5	СЕМЕНЪ МАХОТИ
6	НЪ ЦЫНГОТНОЮ
7	БОЛЪЗНИЮ ВОЛЕЮ
8	БОЖИЕЮ ПОМРЕ
9	КОТОРОИ НА СЕМЪ
10	МЕСТЕ И ПОГРЕБЕ
11	НЪ ПО НЕИМЕНИЮ
12	СЩЕННИКА БЕЗ ВСЯ
13	КАГО ПОДОБНО ПРИ
14	ЛИЧНАГО ХРИСТИ
15	АНСКАГО ОБРЯДА

墓誌の中で最も鮮明さを欠き、しかも文脈上判読しがたいのは、8行目の後半の ПОМРЕ (<помереть) と、13行目の真中の ПОДОБНО (<подобный) である。これらはもっと別の読み方をすべきかもしれない。

墓誌は文法的にはとりたてて特徴はないが、正字法の点では次のような特色が見られる。

Ѡ の代りに е が用いられていること。апреля (1), месте (10), немению (11) の е は、当時の規範的な正字法にしたがえば Ѡ でなければならない。正しく Ѡ が用いられているのは бользнию (7) だけである。

і の代りに и が用いられていること。божиею (8), христианскаго (14-15) の и は同じく і となるべきところ。експедиции (3-4) は元來 -ции と刻まれていたのかもしれない。

ѡ の代りに е が用いられていること。експедиции (3-4) がそれである。

й の代りに и が用いられていること。бывшей (2), японской (3), которой (9)。

もっとも上記の諸点は、18世紀末の文章としては、正字法からのさほど著しい逸脱とは考えられない。

матрозъ(4) は現在では матрос と綴るが19世紀まではむしろ前者のほうが正則であったことはいくつかの辞書によって知ることができる¹¹⁾。священника が сщенника(12) と省略されることもごく普通のことであった。

念のために、村山教授の解読と上記の筆者による試読の相違を列挙すれば次のとおりである。

(行)	(村山案)	(中村案)
2	БЫВШИ	БЫВШЕИ
3	СТРАНЕ	ЕКСПЕ
4	ЛИШИ [ЛІСЯ]	ДИЦИИ
5	МАРТИ	МАХОТИ
8	ДОБРОЙ	ПОМРЕ
10	ПОГРЕБЕ	И ПОГРЕБЕ
12	СВЯЩЕННИКА	СЩЕННИКА
13	ДОЛЖНАГО	ПОДОБНО

これからもわかるように、病死した水兵の姓は村山教授によればマルチン Мартин であるのに対し、私の読み方ではマホーチン Махотин である。なお今泉氏はマロチン Малотин と読まれた。

拙案にしたがって墓誌を読めば、その大意は次のようになる。

1793年4月11日、日本派遣隊所属水兵セミヨン・マホーチンは神意によって壊血病のために死亡、司祭不在の理由で然るべきキリスト教儀式をいっさい執り行なわぬままここに埋葬さる。

現在長崎や函館のロシア人墓地には、大小さまざまな石づくりの墓が立ちならんでいる。それらの墓石ならびにそこに刻まれた碑文とくらべてみると、日本で最初に一命を失う不幸をもったセミヨン水兵の墓は簡素さを

もって際立っている。ここには、およそ墓誌として不可欠の要素である故人の死亡時の年齢すらない。ひょっとしたら、彼の享年を知っていたのは神のみであったかもしれない。

3

最後に、セミヨン水兵の墓誌の拓本がいかなる径路で桂川家の手にわたったかについて一言しておこう。今泉氏は二つのルートを想定された。第一はラクスマンと折衝した役人あるいは通訳を通じて、第二は近藤重蔵からの贈り物、である。『北樞聞略』の編者である桂川甫周は、將軍の侍医をつとめていた。將軍家斉が帰国したばかりの光太夫と磯吉を江戸城に召し出したときには、籠外にあって質問者の役割も果たした。加藤肩吾が書いた『魯西亜紀聞』の一異本ともみられるものが桂川家に伝わっていることを考え合わせると、甫周とラクスマン事件関係者との結びつきは相当にふかかったものと推測される。

一方、甫周・中良の兄弟は蘭学者として、近藤重蔵とも親しい関係にあった。『惜字帖』の中には重蔵から贈られたものが少なくないという。今泉氏も引いておられるが、村尾水哉編の年譜によると重蔵は寛政十年（1798）に松前蝦夷御用取締を命ぜられて以来、同年から享和二年（1802）まで毎年蝦夷地へおもむいたり、そこで越年したりしているし、しばらく間をおいて文化四年（1807）にもまた蝦夷へ出張している¹²⁾。とくに蝦夷警備の目的をもって東部地方を巡検した寛政十年と翌十一年には、再度根室に立ち寄っている。重蔵が『東遊雑記』の著者である備中の古河古松軒に送った長文の書簡の中に次のような一節がある。

（寛政十年）六月廿三日アツケシ出立、

ピバセ・アツケシを経て、ネモロに至る。此地はキイタツブ領と唱へ、北はクナシリ島、東はイツカマツフミ出崎、西はメナシ・シベツよりシレトコ迄凡七八日路。ネモロは去年魯西亜人伊勢の漂民を送り渡来候地にて、今尚其故跡残り有之候¹³⁾。

同じ手紙の後段で、重蔵はその翌年も根室をおとずれたことを報じている。

（寛政十一年）四月廿四日松前渡海、五月九日御用地ウラカワへ入、六月十三日ネモロよりクナシリへ渡海、同十九日アトイヤへ着致候。何方も昨年巡覧の地、山川再会の想をなし面白覚申候¹⁴⁾。

このように重蔵は少なくとも二度根室に足をとどめ、ラクスマン使節団の「故跡」に接した。ロシア人の煙突づきの宿舎はまだそのままのこり、セミヨン水兵の墓も朽ち果てずに立っていたことであろう。最初かあるいは二度目の巡視のさいに、重蔵は異国の文字でしるされた墓誌を拓本にとったのではあるまいか。墓が立てられてからそのときまでに5年あるいは6年あまりの年月がたっている。村山教授は墓標の木目の目立ち方からみて、今泉家拓本は近藤重蔵から贈られたものである可能性がたよいと述べておられる。私もその説に賛成したい。

上述の『露人根室冬營之図』を見ると、運上屋の背後に十本ほどの木が描かれ、「此辺皆松檜ノ木立」とある。檜のような堅木は一般に刃が立ちにくいし、また木目の並び方から判断して、おそらく墓標に用いられたのは、宿営地の近くから切り出した松材であったと想像される。

(1973. X. 15)

注

1. 亀井高孝校訂『北槎聞略』, 昭12, p. 4-5。なお, 41名という計算はまちがっている。42名になるはずである。
2. А. Полонский *Курилы*. СПб., 1871, стр. 110.
3. 東京松平氏旧蔵。『新撰北海道史』第2巻通説1, 昭12, 図版28.
4. 現在天理図書館蔵。亀井高孝『光太夫の悲恋』, 昭42, p. 94-95.
5. Журнал посольства А. Лаксмана в Японию. *Исторический архив*, 1961, No. 4, стр. 125.
6. *ibid.*, стр. 128.
7. В. М. Головнин, *Записки флота капитана Головнина о приключениях его в плену у японцев в 1811, 1812 и 1813 годах……*, СПб., 1816, ч. 1, стр. 233.
8. 今泉源吉『蘭学の家 桂川の人々』, 昭40, p. 384.
9. たとえば『日本幽囚記』の中にゴロヅニーンづきの通訳兼医師としてあらわれるトーゴなる人物がある。村山七郎氏は, これに「藤吾」の文字をあて, 加藤肩吾と推定しておられる。「加藤肩吾著『魯西亜実記』(魯西亜紀聞)の文献学的研究」, 『順天堂大学体育学部紀要』第10号, 1967, p. 132.
10. 村山七郎編著『ロモノソフ以前の二つのロシア文法』, 1971, 九州大学文学部言語学研究室発行, p. 171以下。私はつい最近, 村山教授から本書を恵与された。厚く御礼を申し上げたい。
11. たとえば *Словарь Академии Российской по азбучному порядку расположенный*, СПб., 1814; *Словарь церковно-славянского и русского языка*, СПб., 1847 (2-е Изд. 1867) など。ただし, Дальの有名な辞書では *матрость* である。
12. 『近藤正斎全集』第1巻, 明38, 「近藤守重事蹟考」, p. 3-4.
13. 同上, p. 22-23.
14. 同上, p. 25.